



SETOUCHI
2025

SETOUCHI 2025

建築国内フィールドワーク

参加学生

[2 年]

前畑 七海

大中 香乃夢

[1 年]

稗田 莉子

田中 芹奈

引率教職員

窪田 勝文

塚野 路哉

日程

8/19 (火)

京都駅集合

> 専用車にて移動

■京都府立陶板名画の庭

錦鶴にて昼食

■龍安寺 石庭

■猪名川霊園

ホテル (hotel it. Osaka Shinmachi) チェックイン

ホテル内レストランにて夕食

ホテルにて振返り学修

8/20 (水)

ホテルにて朝食、チェックアウト

> 専用車にて移動

■日本橋の家

司馬遼太郎記念館周辺にて各自昼食

■司馬遼太郎記念館

■本福寺水御堂

ホテル (シーサイドホテル舞子ビラ神戸) チェックイン

ホテル内レストランにて夕食

ホテルにて振返り学修

8/21 (木)

ホテルにて朝食、チェックアウト

> 専用車にて移動

■イサムノグチ庭園美術館

■MIMOCA 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

MIMOCA CAFEにて昼食

■G-HOUSE

G-HOUSEにて振返り学修

高速道路サービスエリアにて各自夕食

岡山駅着、解散

DAY1

京都府立陶板名画の庭

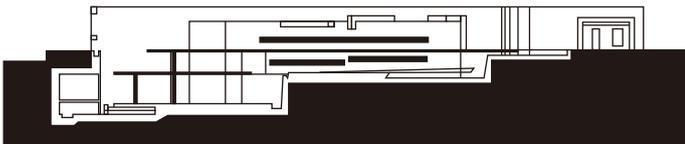
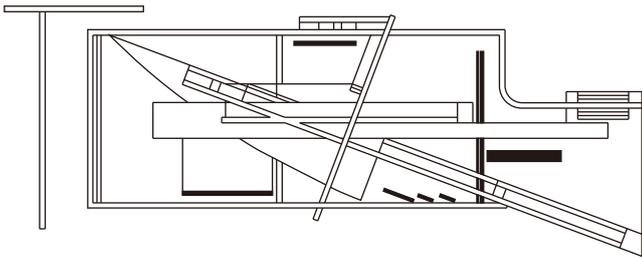
安藤忠雄

1994

Location : 京都

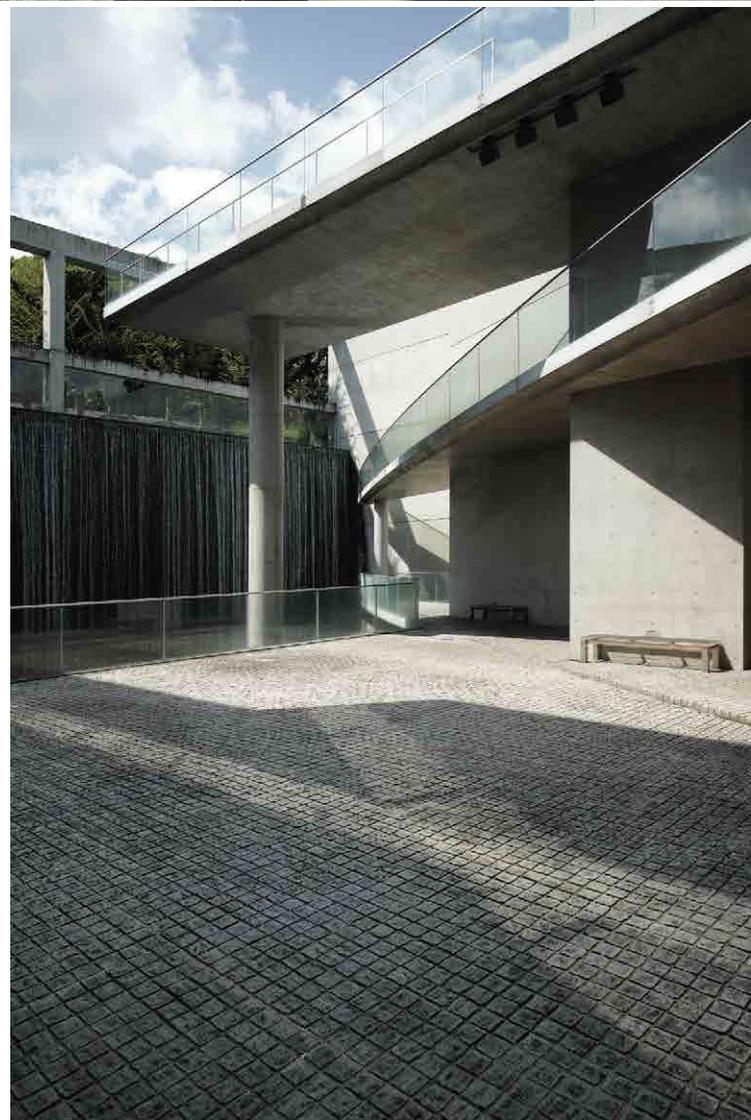
Site area : 2,849.1 m²

Floor area : 212 m²

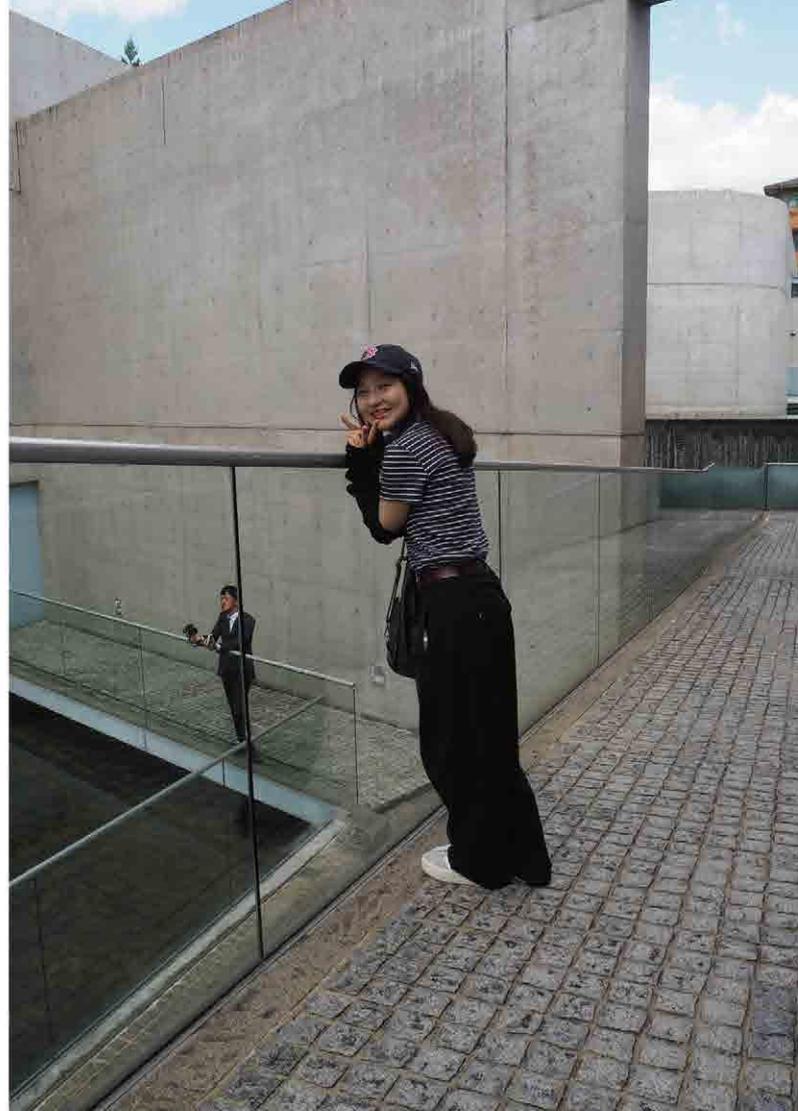




Exterior



Exterior





DAY1

龍安寺 石庭

1499

Location : 京都

Site area : 248 m²



Exterior



Exterior





DAY1

猪名川霊園

David Chipperfield

2013

Location : 兵庫

Site area : 144,477.28 m²

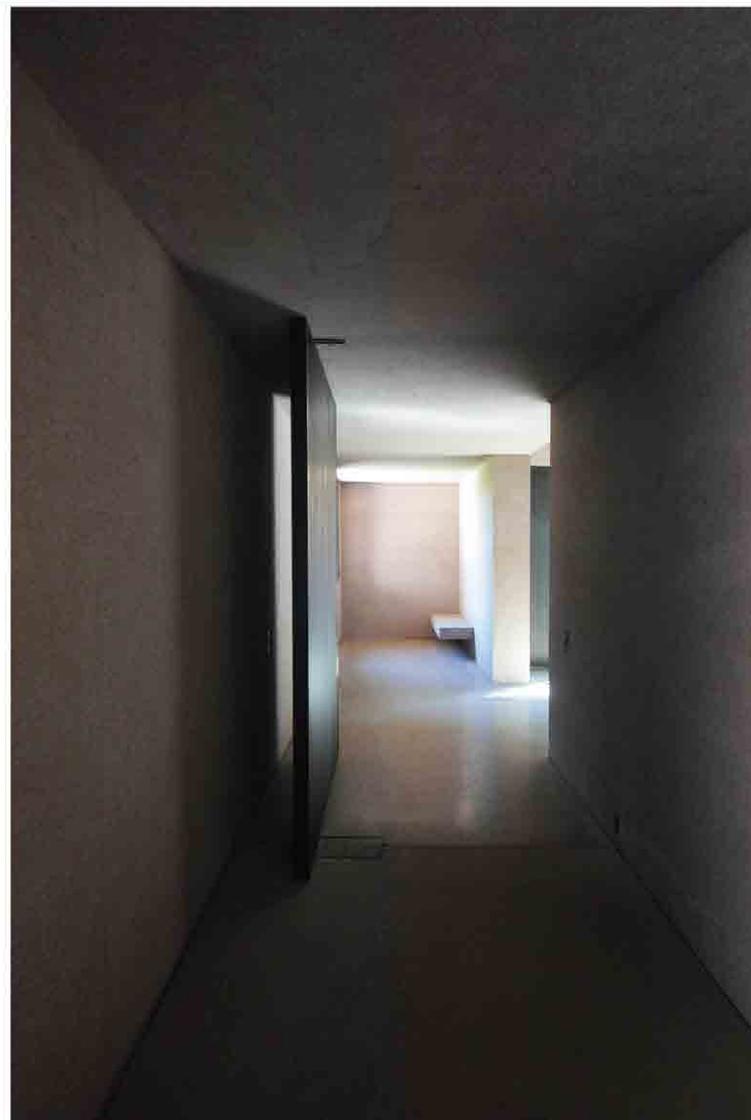
Building area : 631.08 m²

Floor area : 493.08 m²

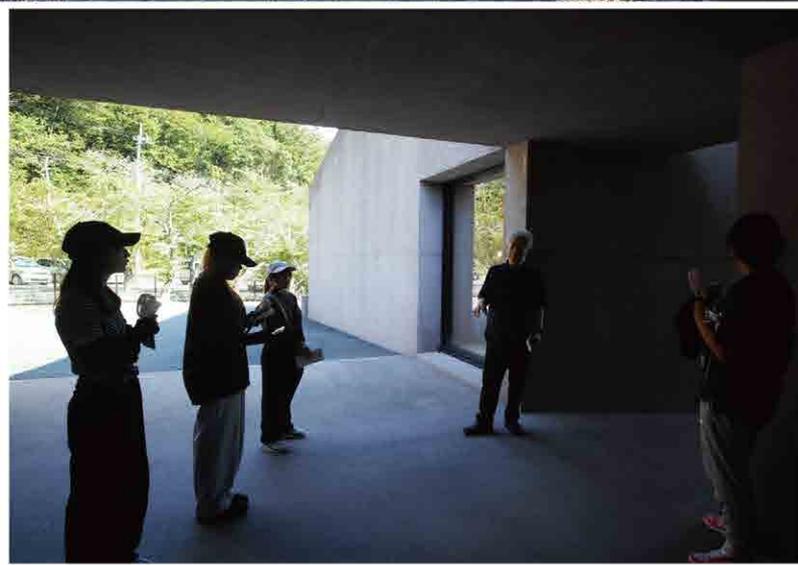




Exterior



Interior





DAY2

日本橋の家

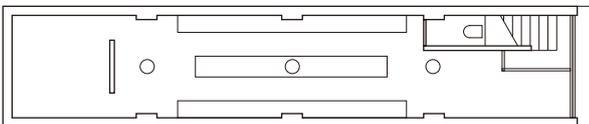
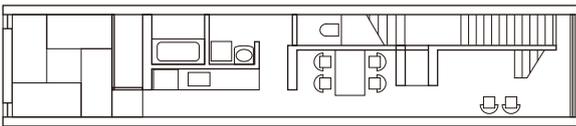
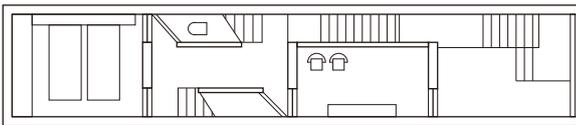
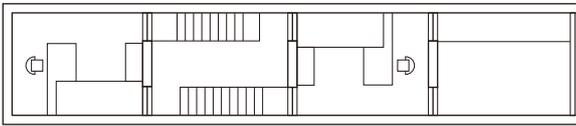
安藤忠雄

1991

Location : 大阪

Site area : 57.8 m²

Total area : 139.1 m²



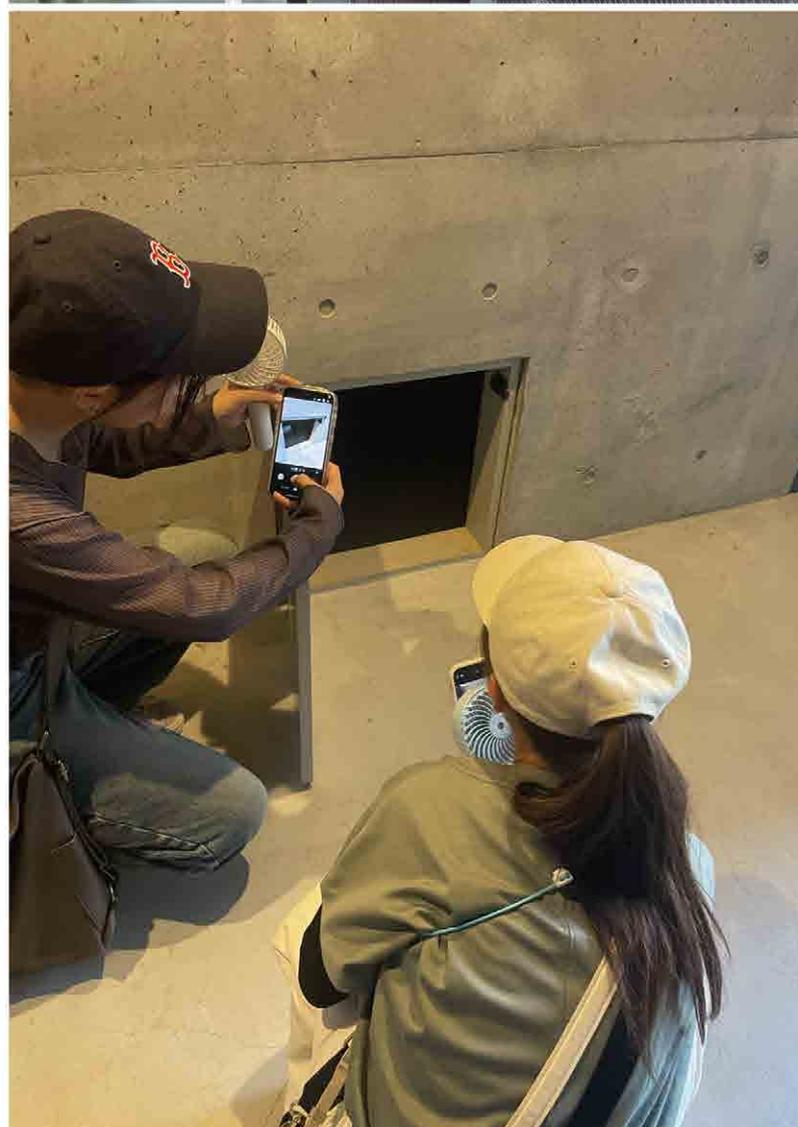


Interior



Interior





DAY2

司馬遼太郎記念館

安藤忠雄

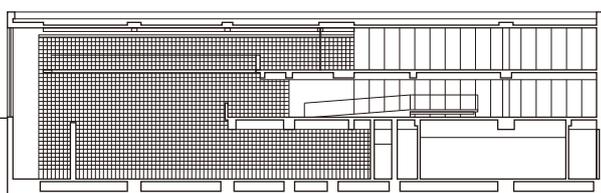
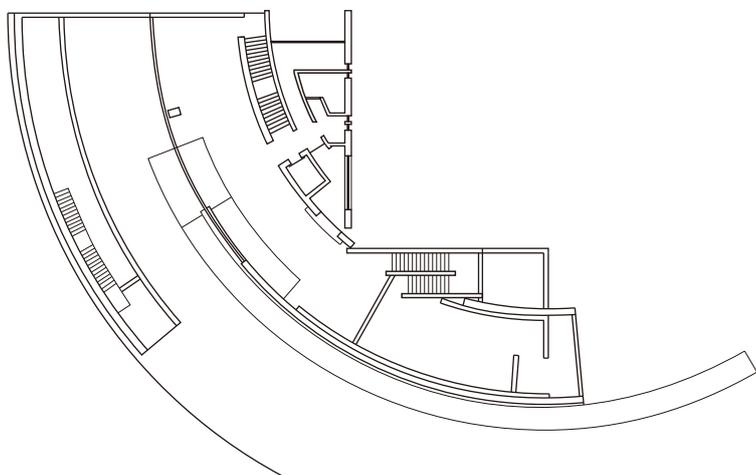
2001

Location : 大阪

Site area : 1,009.96 m²

Total area : 997.05 m²

Building area : 445.86 m²

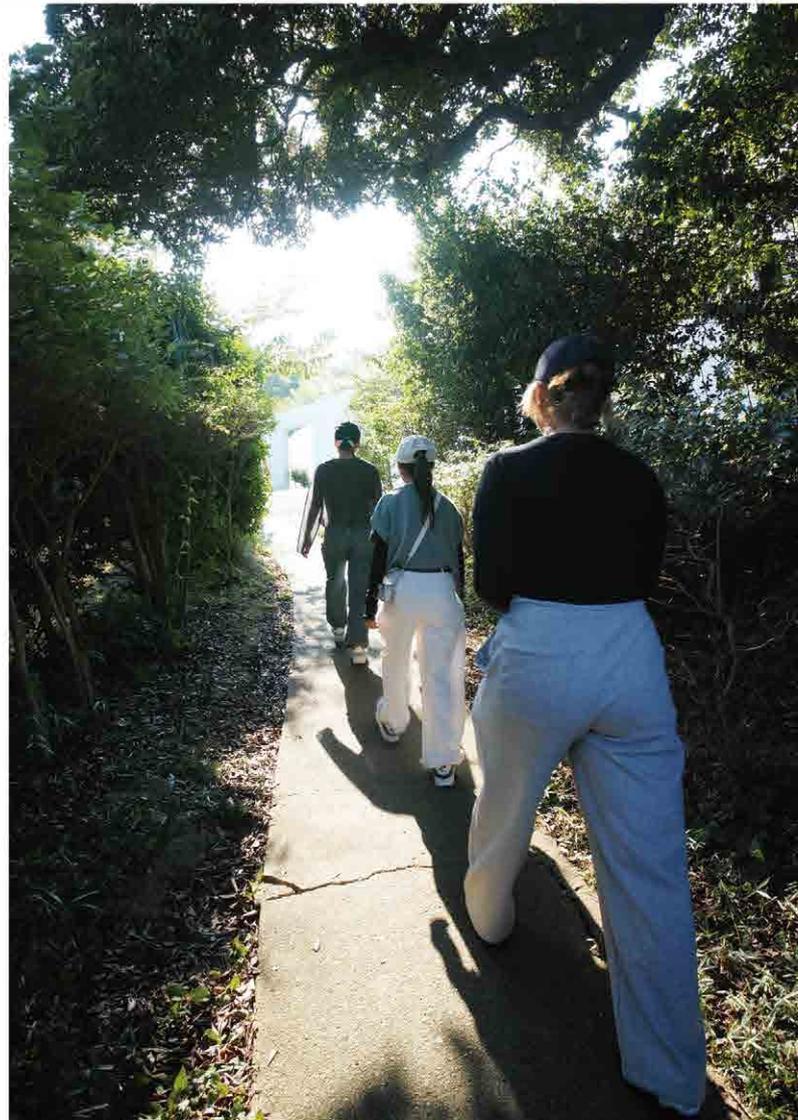


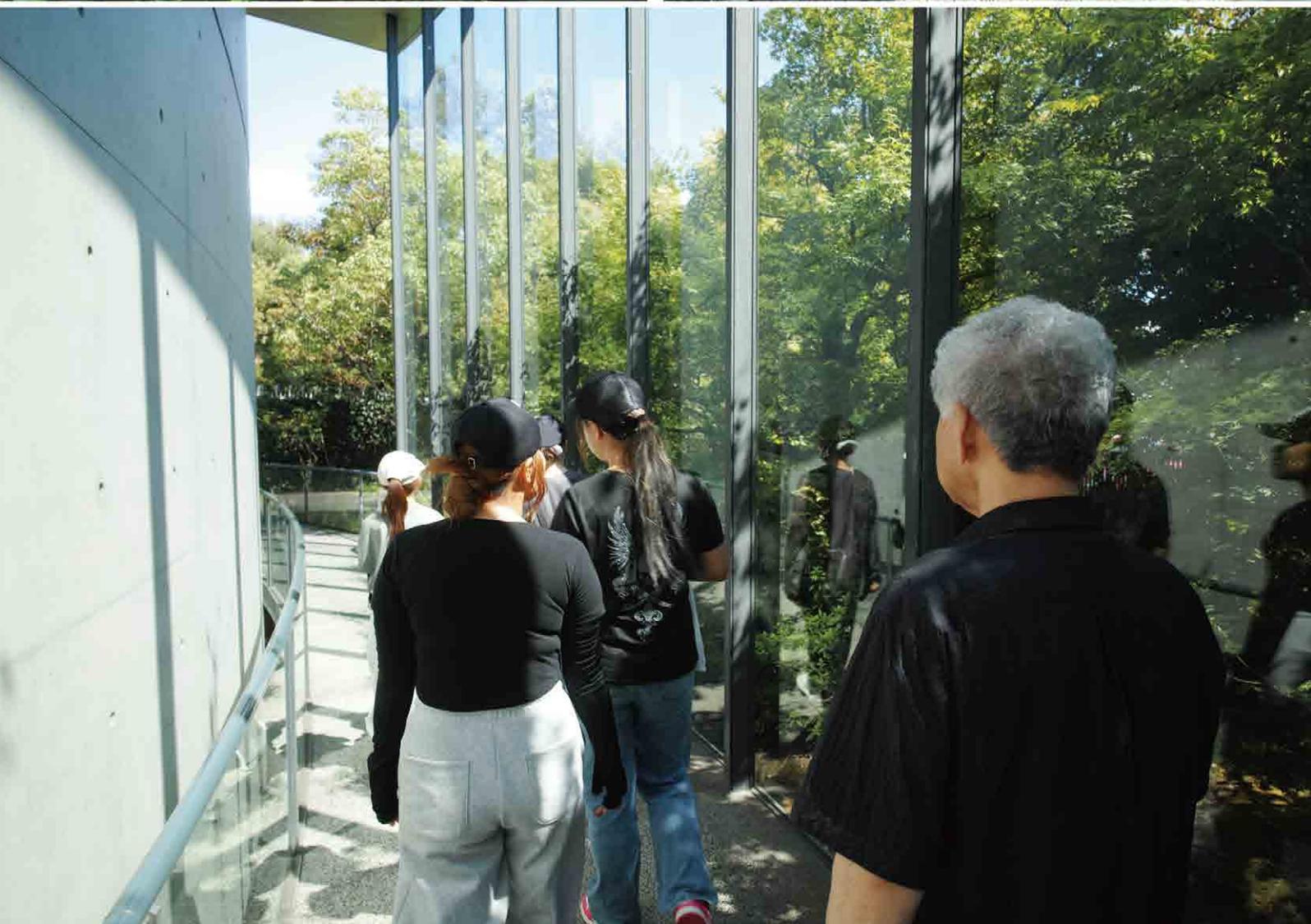
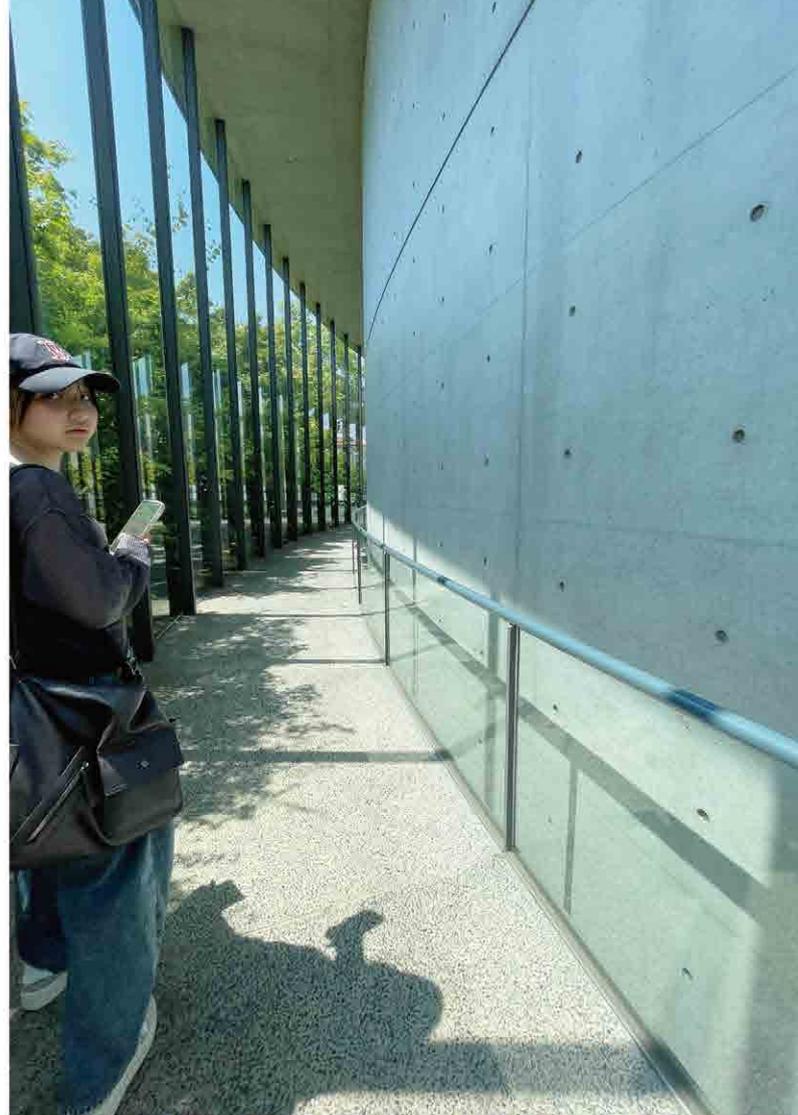


Exterior



Interior





DAY3

本福寺水御堂

安藤忠雄

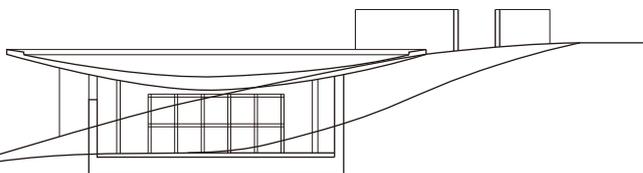
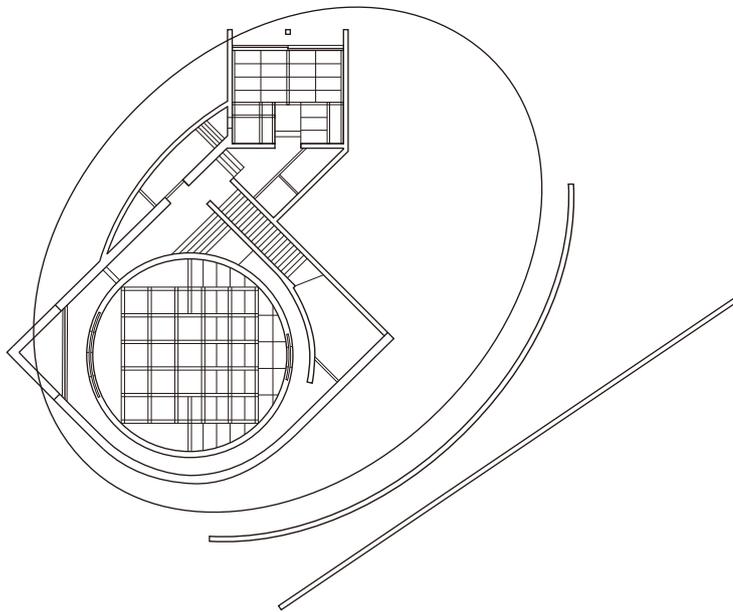
1992

Location : 兵庫

Site area : 2,990.75 m²

Total area : 417.16 m²

Building area : 859.47 m²

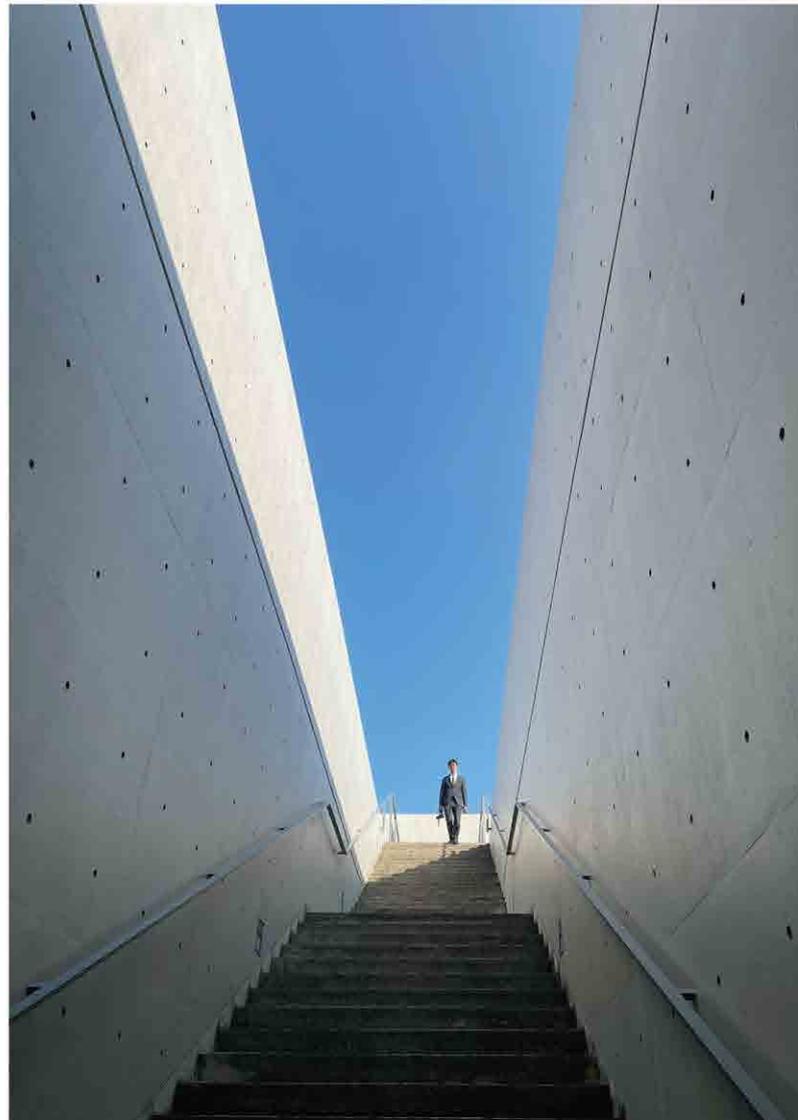
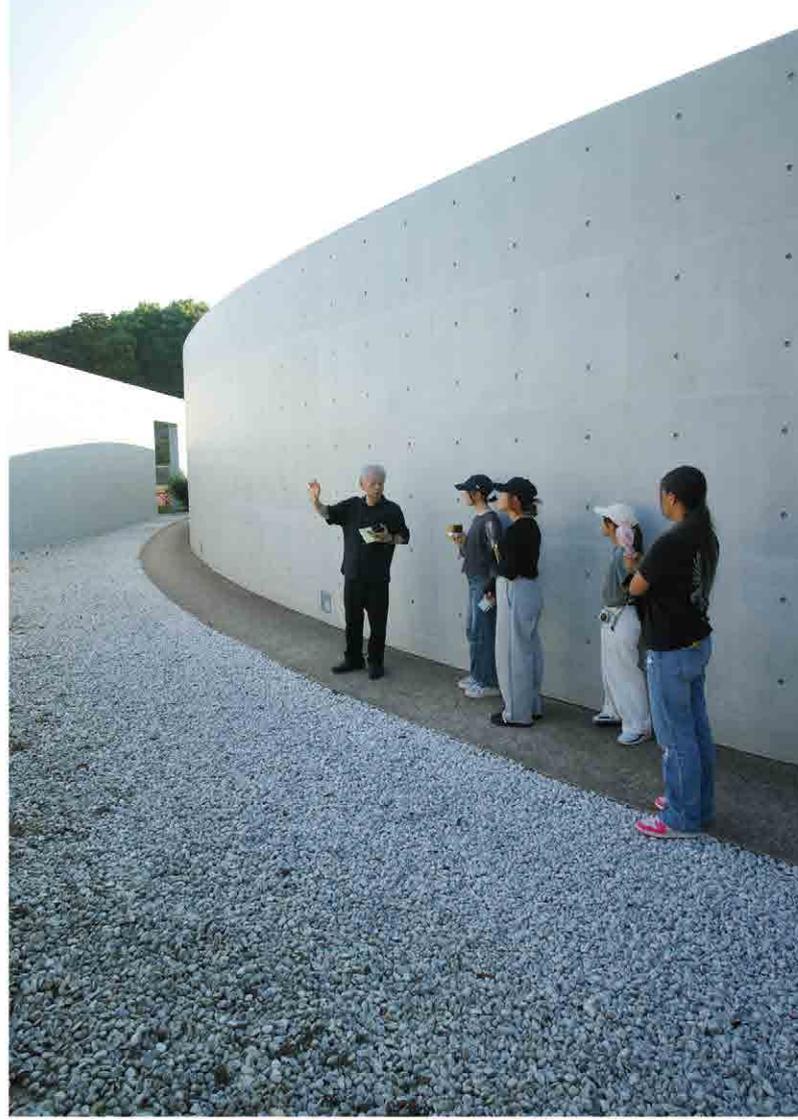
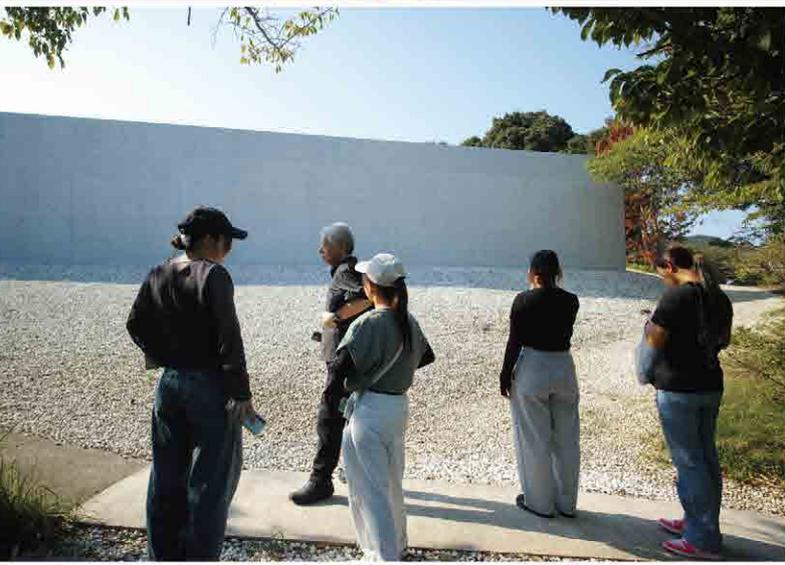




Exterior



Interior





DAY3

イサムノグチ庭園美術館

1969

Location : 香川

Site area : 6262 m²



Exterior



Exterior





DAY3

MIMOCA 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

谷口吉生

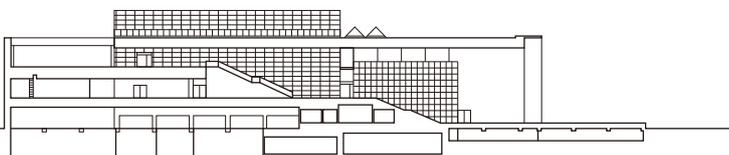
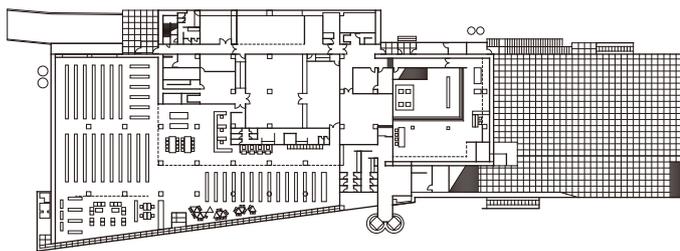
1991

Location : 香川

Site area : 5,974.53 m²

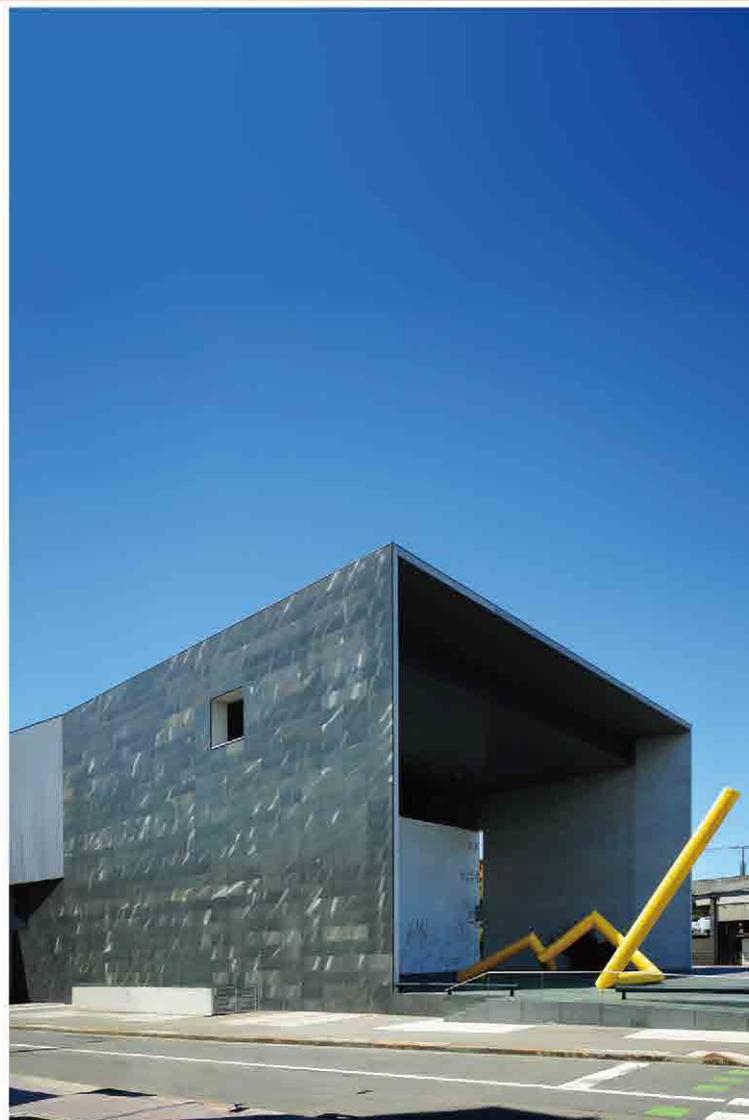
Total area : 11,413.95 m²

Building area : 3,564.80 m²

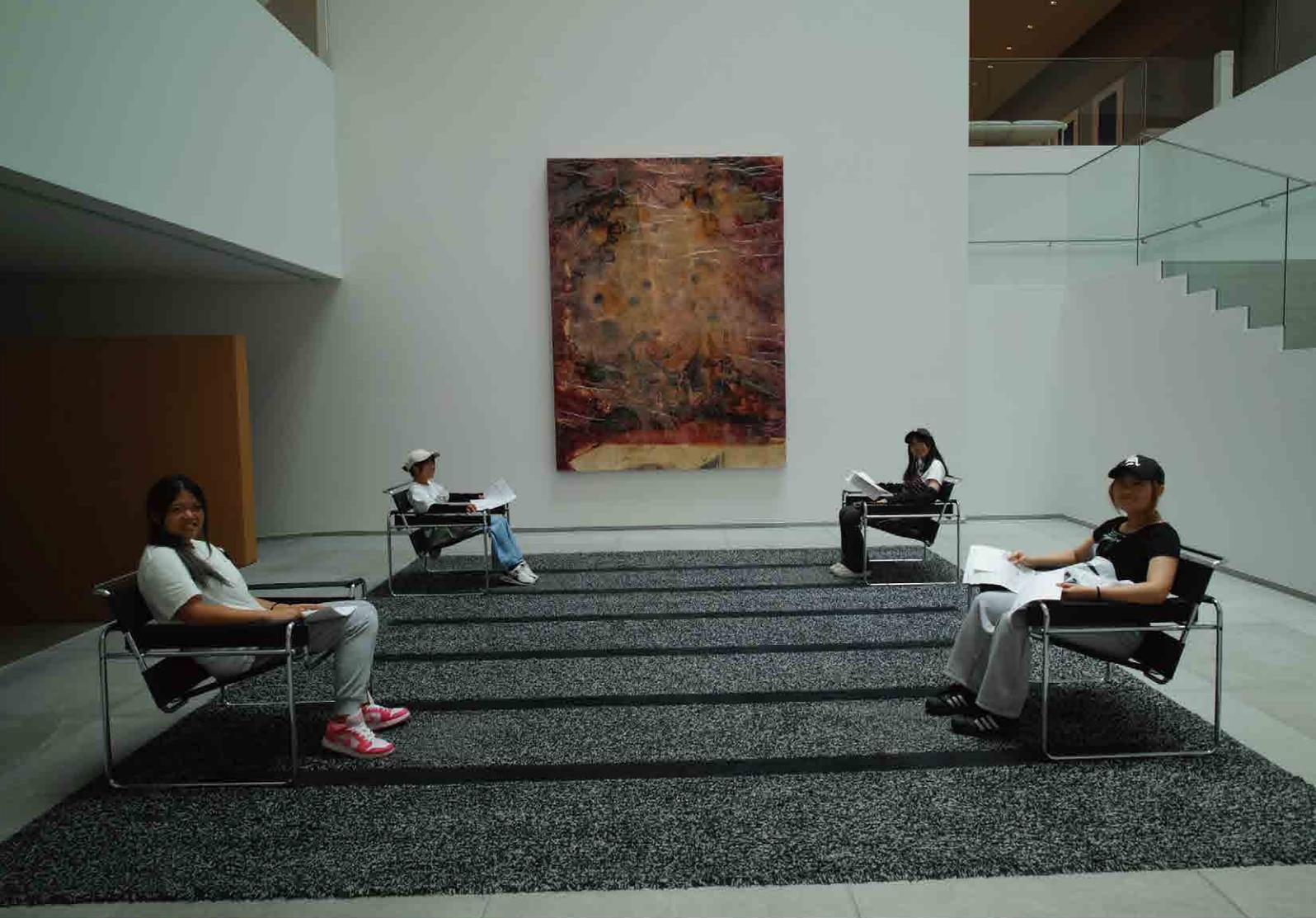




Interior



Exterior





DAY3

G-HOUSE

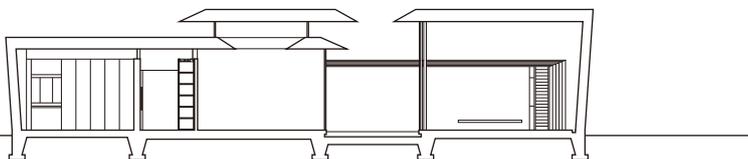
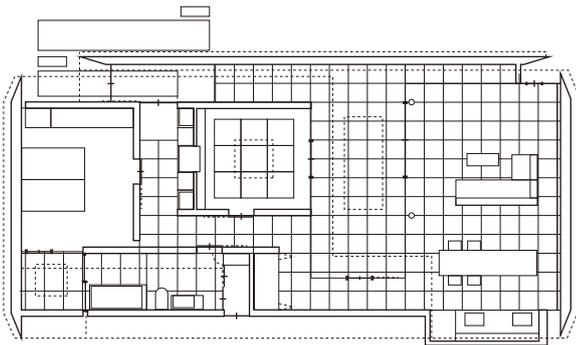
窪田勝文

2013

Location : 愛媛

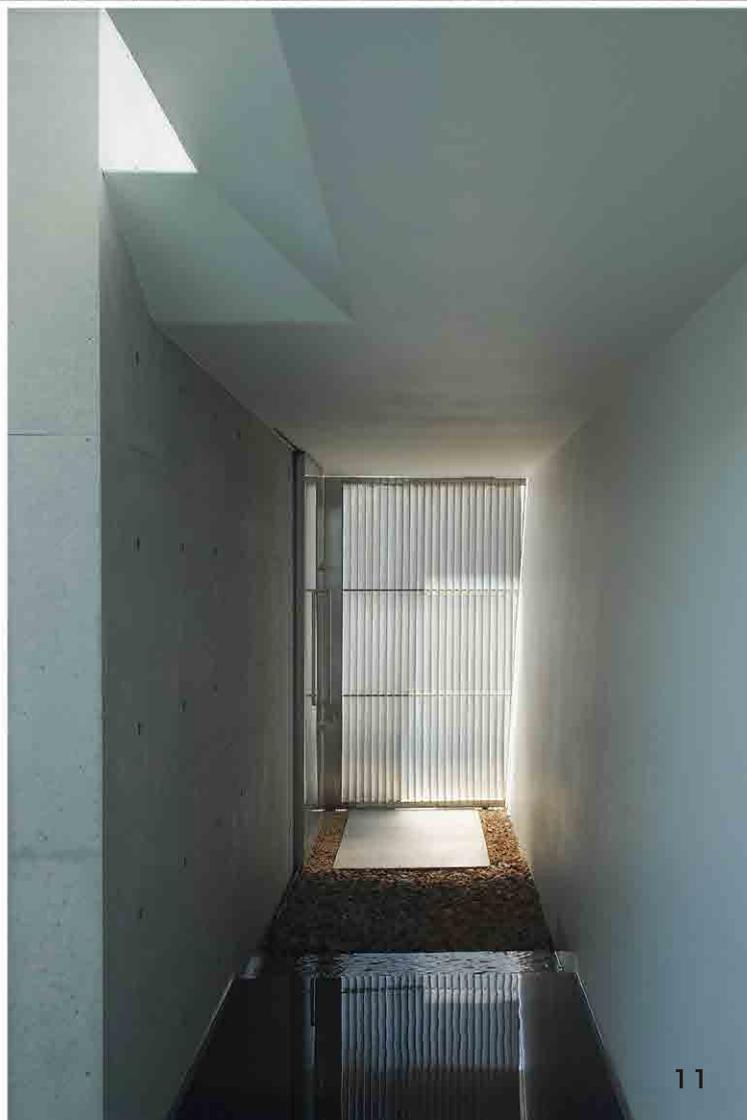
Site area : 479.67 m²

Total area : 133.77 m²

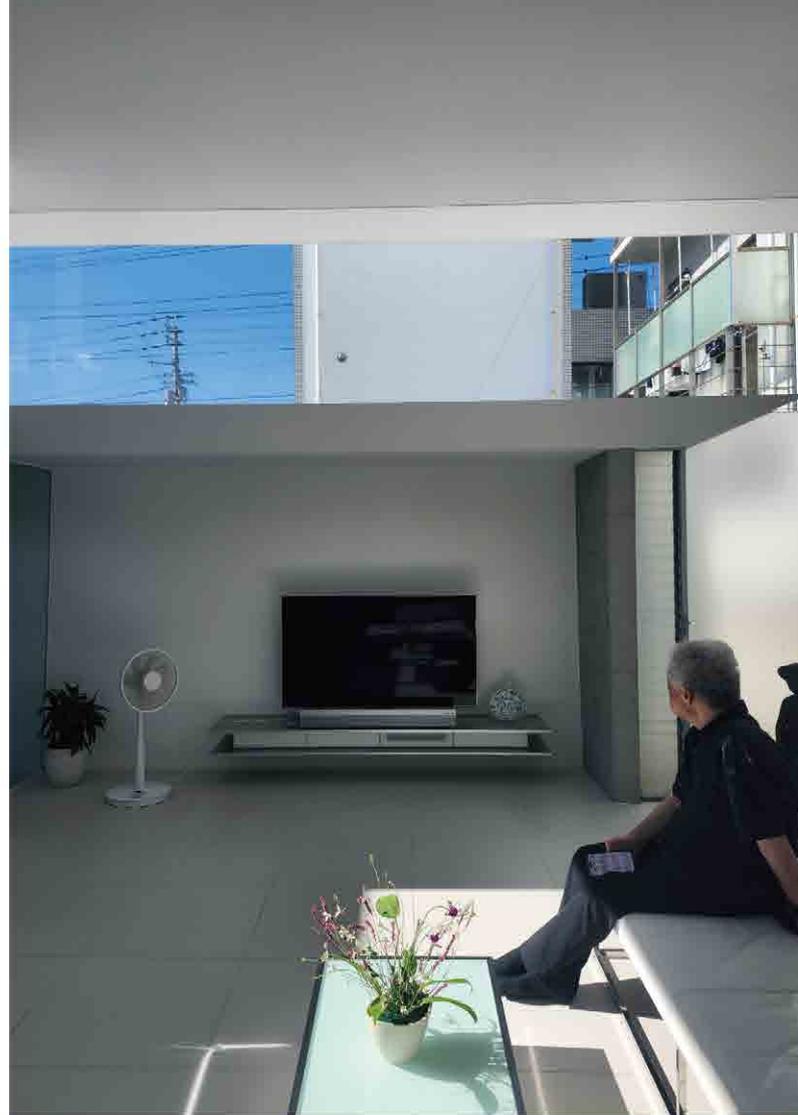


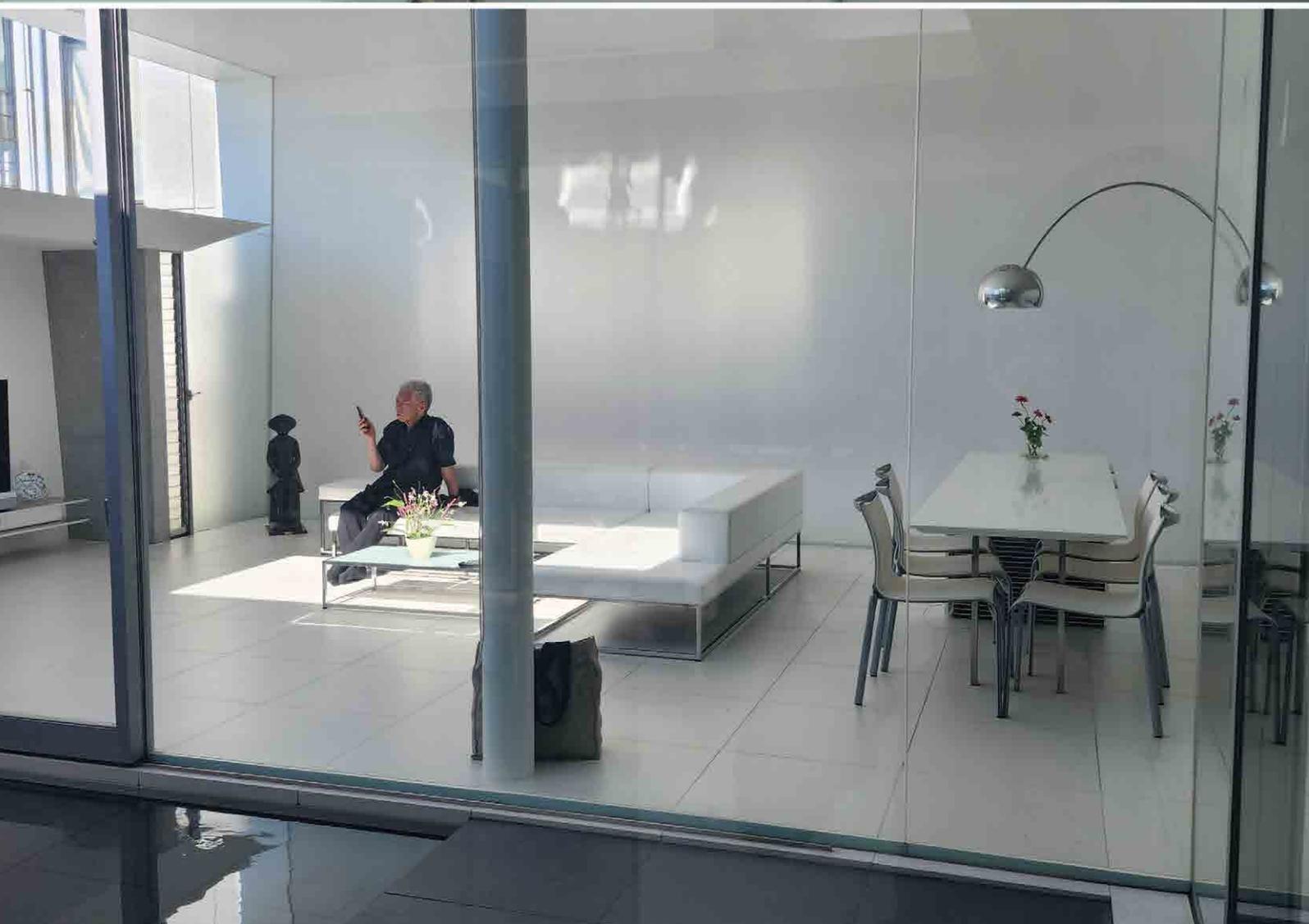


Exterior



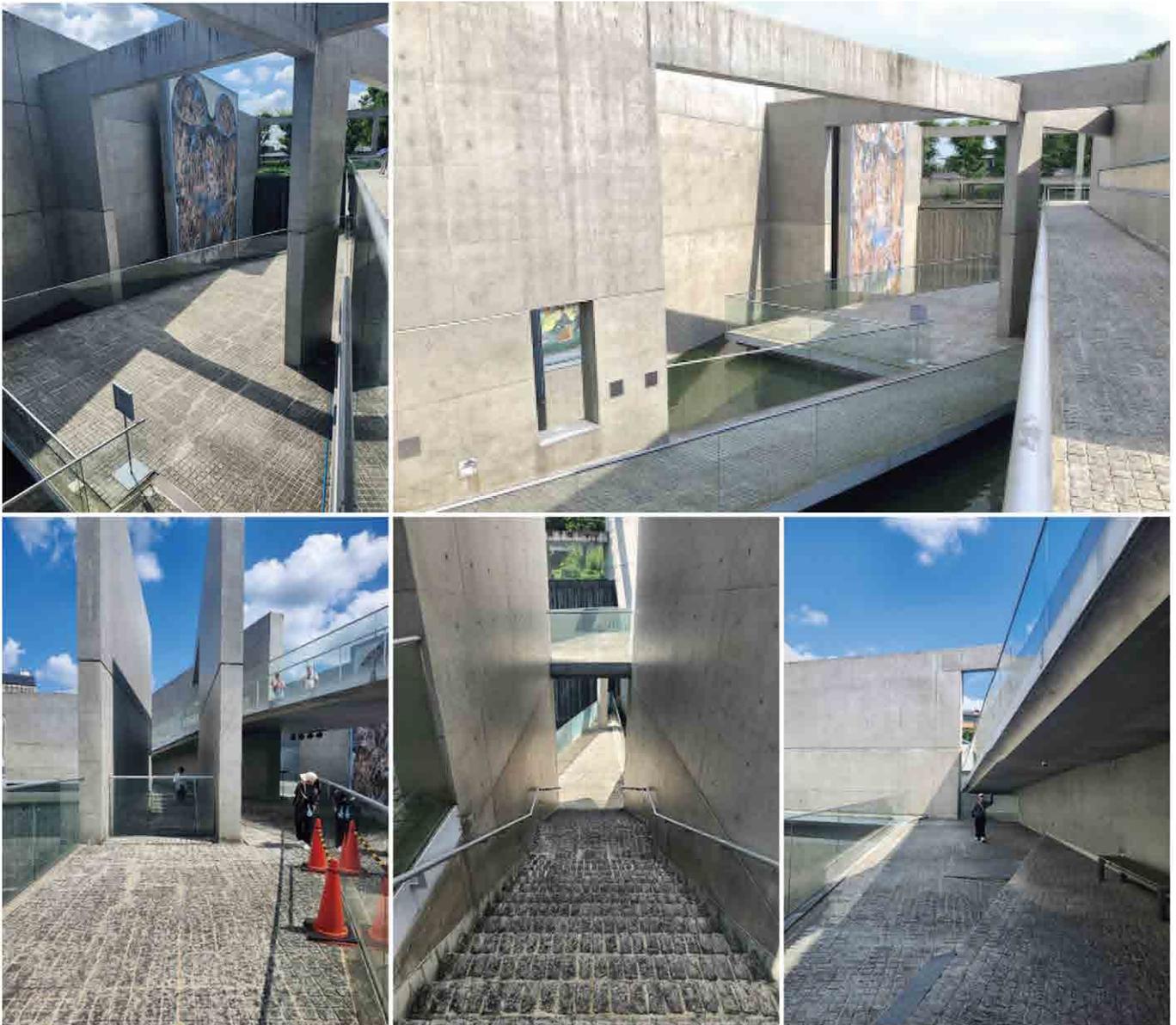
Interior





京都府立陶板名画の庭 / 安藤 忠雄

前畑 七海



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

陶板名画の庭は、京都の都市と自然の境界に建ち、水や光、背後の植物園の緑を取り込むことで、周囲と調和した独自の空間をつくり出していた。都市の喧騒から離れ、壁と水盤を通して中へ入ると、静かで落ち着いた雰囲気へと切り替わり、外の景色や自然とつながりながら名画を鑑賞できる場となっていた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

陶板名画の庭を遠くから目にしたときの第一印象は、重厚で大きなコンクリートの壁が、とても大きな存在感があり、周囲の環境から切り離された特別な場であるかのように感じた。外観はシンプルな造形でありながら、その内側に非日常の空間が広がっていることを予感させた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

入口に向かって歩くと、壁の向こうにあるはずの水盤や陶板名画が少しずつ見えてきて、内部の景色への期待と好奇心が膨らんでいく。水面が視界に入り、水の流れる音が聞こえてくると「何があるのだろう」「どんな景色が待っているのだろう」という思いが強まり、外から近づくその道のり自体が日常から芸術の世界へ気持ちを切り替えるプロセスになっていた。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離まで近づくと、コンクリートの壁の質感やひんやりとした空気感が強く伝わり、外界とは切り離されたような静けさを感じる。水面が間近に広がり、水の揺らぎや音が身体に届くことで、視覚だけでなく聴覚や肌感覚も研ぎ澄まされていく。陶板名画が目の前に現れると、そのスケール感と色彩の鮮やかさに圧倒され、単なる鑑賞ではなく「空間そのものの中で絵画に包まれる」という感覚が生まれる。

F5. 内部と外部の関係性

コンクリートの壁で囲まれた空間は一見閉ざされた印象を与えるが、壁の上部や通路の隙間から空や木々が見えるように計画されている。光や風が差し込み、自然の気配を感じられることで、内部にいながらも外の世界とのつながりを意識できる構造になっている。

F6. シークエンスの展開

入口から内部へ進む動線に沿って、光や影、水、陶板名画の見え方が段階的に変化するよう設計されている。コンクリートの壁や水盤の演出によって、内部と外部、建築と自然、絵画の関係性が連続的に体感できるようになっており、来館者は歩くたびに、視覚や聴覚の印象の変化を楽しむことができる。

F7. ティティールが心に与える印象

水の流れる部分は表面に凹凸をつけることで、水音がより細やかで繊細に響くよう工夫されていた。また、コンクリートの角はアール状に削り取られており、厚みを感じさせずに全体をすっきりとした印象にまとめていた。

F8. 建築に使っている素材について

コンクリートは壁や床などの構造体に使われ、打ち放しの仕上げによって硬質な質感と美しさを両立している。また、ある作品では前面に立つコンクリートの壁が額縁のように絵画を縁取り、まるで建築自体が作品の一部であるかのように見せていた。

F9. 建築見学をしての感想

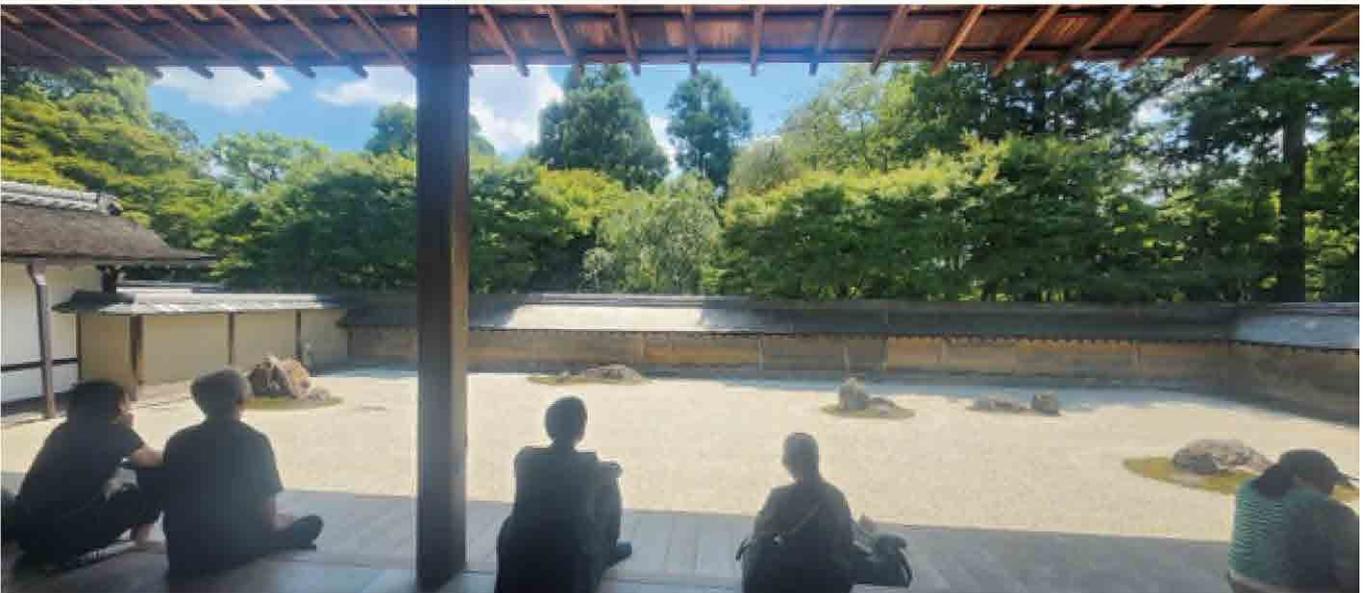
京都の陶板名画の庭は、コンクリートの硬さと水や光の柔らかさがうまく組み合わさっており、とても美しい空間だと感じた。歩くたびに光の入り方や水音が変わり、内部と外部がつながっているのを自然に体感できる。外部空間にある美術館は今まで行ったことがなかったので、新鮮で楽しかった。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

大きな壁に挟まれた階段を下り、折り返した先に広がる最も大きな絵画を目にした瞬間がとても印象的だった。絵画の横には滝のように水が流れ、水音に包まれながら、ミケランジェロの「最後の審判」の圧倒的な大きさに圧倒されながら鑑賞した。

龍安寺 石庭

前畑 七海



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

建物や庭と周囲の自然がうまく調和している。塀に囲まれているため一見外部とは隔てられているが、塀の高さや配置によって背後の樹木や空が見え、庭の中にいながらも外の景色とのつながりを感じられる構成になっていた。縁側から庭を眺めると、建物・庭・自然の関係から内と外がつながる感覚を体験できる。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

龍安寺の石庭を遠くから見ると、まず白砂と石が整然と並んでいて、シンプルだがどこか落ち着く印象を受ける。塀に囲まれて閉ざされた感じがあったが圧迫感はなく、背後に樹木や空が少し見え、外の環境ともつながっているような気がした。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

石庭に近づくとき、石や白砂の景色が徐々に鮮明になり、「静かだけど抽象的」だった印象が、手に触れられそうなりリアルな空間へと変わっていった。歩いていくうちに、砂の目や石の形など細かい部分が目に入り、静けさと同時に庭への関心が自然に高まっていった。縁側に立つと視界が一気に開け、庭全体の奥行きが見渡せ、感動と落ち着きが同時に味わえる体験となった。

F4. 至近距離で何を感じるか

石庭は土塀や方丈によって囲まれているため外部とは切り離された空間となっていた、その塀の高さや方丈の配置によって、庭を見る位置や角度が制限され、訪れる人の視線や動線が意図的に石庭へ誘導されているように感じた。

F5. 内部と外部の関係性

龍安寺の石庭は外部から隔てられた空間であるが、石庭を囲む塀の高さが考えられており、石庭の背後に樹木や空の一部が視界に入ることによって、庭の景色が自然に溶け込みつつ外部とのつながりも感じられる構成になっていた。

F6. シークエンスの展開

内部に入ると、建物の裏手へと導かれ、庭に面した建物を囲む外側の廊下を進む構成になっている。通路の先に石庭がふっと現れる瞬間、視界が一気に開け、光の明るさの変化とともに景色が広がる様子が、まるでシークエンス展開のように感じられた。

F7. デティールが心に与える印象

白い砂利に丁寧に整えられた線が、穏やかな波のように広がり、静けさの中にもやわらかな動きを感じた。石と砂の対比が美しく、人の手と自然の調和が伝わってくる。また、石の一つひとつの大きさや形が異なり、それぞれが空間の中で絶妙なりズムを生み出していた。

F8. 建築に使っている素材について

石や砂、苔、土塀といった自然素材が巧みに使われている。素材そのものの質感や色合いが、光や影の変化と相まって、時間や季節によって異なる表情を見せる。人工的な装飾を極力抑え、素材本来の美しさを際立たせることで、心が自然に安らぐ空間が生まれている。

F9. 建築見学をしての感想

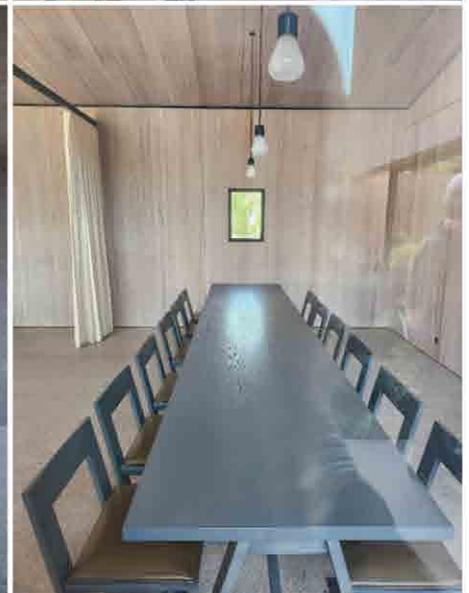
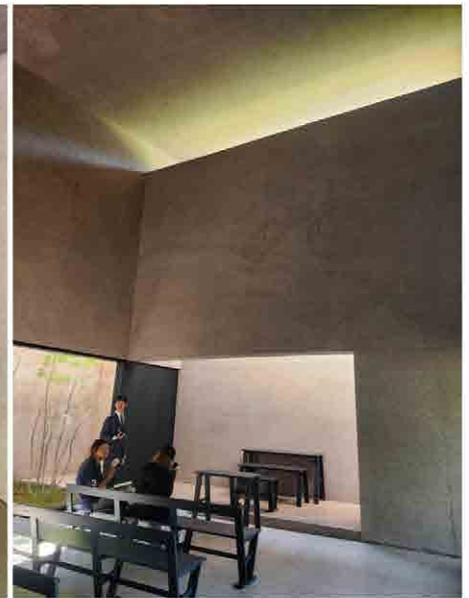
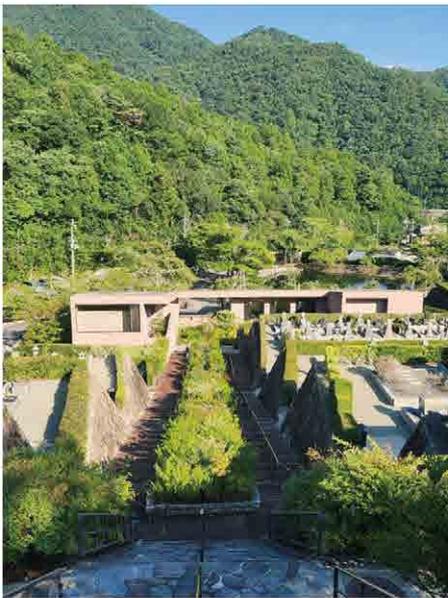
静けさに包まれ、心が自然に落ち着く場所だった。石や砂の配置、光や影の変化に目を奪われ、見ているだけで時間を忘れるほど没入できた。無駄のない美しさが心に深く響き、静かに自分と向き合える庭だと感じた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

最も心が動いたのは、庭の前の縁側に座り、石庭を静かに見つめた瞬間だった。砂や石、土塀、そしてその上に広がる空が一つの世界のように感じられた。石の絶妙な配置に自然の秩序が反映されているように感じ、無言の美しさに包まれたような気がした。

猪名川霊園 / David Chipperfield

前畑 七海



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

霊園は自然豊かな丘陵地に位置しており、建物や墓地、参道の配置は地形や樹木の景観と調和していた。建物に使われている石の質感や色合いが、周囲の樹木や季節の変化、光や風の入り方と絶妙に組み合わせることで、静かで落ち着いた祈りの場としての雰囲気を作り出している。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

猪名川霊園の建物を遠くから見ると、自然の丘陵や緑に溶け込むように低く落ち着いた佇まいで、人工的な存在感を強く主張せず、周囲の景観と調和している印象を受ける。建物の素材や形の落ち着いた雰囲気が伝わってきて、静かで心が安らぐ空間だと直感的に感じた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

歩くたびに周囲の緑や光、風の変化を感じ、静かさと同時に内部への関心が高まっていった。建物へ近づく際に、外の景色や日常の雰囲気から霊園の落ち着いた祈りの空間へと心を徐々に切り替える体験となっており、歩くことで空間の広がりや奥行き、自然との一体感も感じられた。

F4. 至近距離で何を感じるか

建物に近づくとき壁面の素材の質感や色合いがはっきりと伝わり、静かで落ち着いた雰囲気がより強く感じられる。周囲の緑や光、風の変化も肌で感じられ、自然との一体感が増す。建物や庭の細部を間近で見ることで、設計の細やかさや素材の重みを実感した。

F5. 内部と外部の関係性

建物の内部と外部は互いに影響し合っていて、外の自然や景色が内部に取り込まれ、内部の空間も外の風景や光とながっている。これによって、建物の中においても周囲の自然や環境との一体感を感じられる関係になっている。

F6. シークエンスの展開

アプローチでは、横から差し込む光が壁をやわらかく照らし、歩くごとに明暗の変化が感じられる。折り返した先の大きなドアを抜けると、横から柔らかな日差しが差し込む休憩室のような空間が現れ、すぐには礼拝堂が見えない。そこを右に曲がって進むと、視界が一気に開け、柔らかな光に包まれた礼拝堂が広がる。光と空間の連続的な変化が巧みに構成されていた。

F7. デティールが心に与える印象

天井の空調機器が巧みに隠され、照明も直接光源が見えないように間接照明が用いられており、生活感を排した落ち着いた空間がつけられていた。小さな開口部と必要最低限の家具、控えめな照明で構成された室内は、木材の壁と調和し、素材の温かみと静けさを感じさせる空間となっていた。

F8. 建築に使っている素材について

赤土色のコンクリートが特徴的で、周囲の自然環境とやわらかく調和している。素材の色味が土や木々の緑と自然に溶け込み、重厚でありながら温かみを感じさせる。小さな開口部のため建物としての存在感が控えめになっていた。

F9. 建築見学としての感想

訪れてまず感じたのは、静けさと自然との一体感だった。赤土色のコンクリート壁が周囲の木々や土の色と調和し、建物が風景の中に溶け込むように佇んでいる。開口部からやわらかな光が差し込み、静寂の中で心が落ち着く空間が広がっていた。無駄をそぎ落としたシンプルな構成が、より一層、祈りや静思の場としての深い意味を感じさせた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

心が動いたのは、礼拝堂に足を踏み入れた瞬間だった。外の喧騒から切り離された静けさに包まれ、心がずっと落ち着いた。横から差し込む光が壁や床をやわらかく照らし、空間全体に穏やかな雰囲気をつくり出していた。両側に広がる庭の緑が視界に入り、光と自然の柔らかさが室内に溶け込むことで、内と外の境界が曖昧になり、より深い静寂と安らぎを感じた。

日本橋の家 / 安藤 忠雄

大中 香乃夢



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

日本橋の家は、住宅街の中で建てられていた。建てられていた場所が大通りでもなく、中の方にあったにも関わらず、人通りも多かったため賑やかだと感じた。そして、自然環境はほとんど無いことが分かり、街並みが非常に目立っていた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見ると、住宅街であることからどの住宅が日本橋の家なのかが分からなかった。遠くからでもガラス張りがとても目立っており、コンクリートというものが表側ではほとんど見えなかった。一部だけ窓が開いていることが確認できた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいていくと、入口から内部へと奥へ低い天井から一気に吹き抜けの空間となっていた。開放感もあり、光を取り入れられ、温かみを感じた。コンクリートの住宅は初めての感覚ではあるが、日常に包み込まれていくようだった。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離では階段を上るときは薄暗かったが、中庭などに出ると明るさが全開であった。そして、ソファ代わりとなっている階段で会話をしてみると、非日常的な体験しつつ安心感というものを感じられた。ふんわりとした風も入り、たそがれる空間でもあった。

F5. 内部と外部の関係性

中庭を設けて、内部に光や風を取り入れることで閉ざされた外部とは反対で過ごしやすい環境であり開放的な関係性が生まれる。それからガラスブロックがあり、中庭から光を通して部屋を明るくしていた。当たり前というものを覆していた。

F6. シークエンスの展開

玄関から入ってすぐ階段がある。薄暗い階段の奥には光が見えていた。光の方向へと導かれる。二階と三階へと進み、部屋を通り抜けると吹き抜けとなり開放感を感じられた。

なんとなく空が近いように見えて、ふと見上げたくなる瞬間だった。

F7. デティールが心に与える印象

階段の下は収納を使うイメージが大きかったが、日本橋の家は違った。収納ではなくトイレだったため、工夫がしてあった。それから、ガラスブロックで柔らかな光を取り入れることで部屋を明るくし、過ごしやすい環境であった。

F8. 建築に使っている素材について

素材はコンクリートと一部ガラスを使っていた。夏は暑い環境でもコンクリートを触れば、そこに触れた手は冷たく涼しい気分になるのではないかと感じた。一部ガラスとなっているため、窓を開ければ風が入ってきて良い空間になると感じる。

F9. 建築見学をしての感想

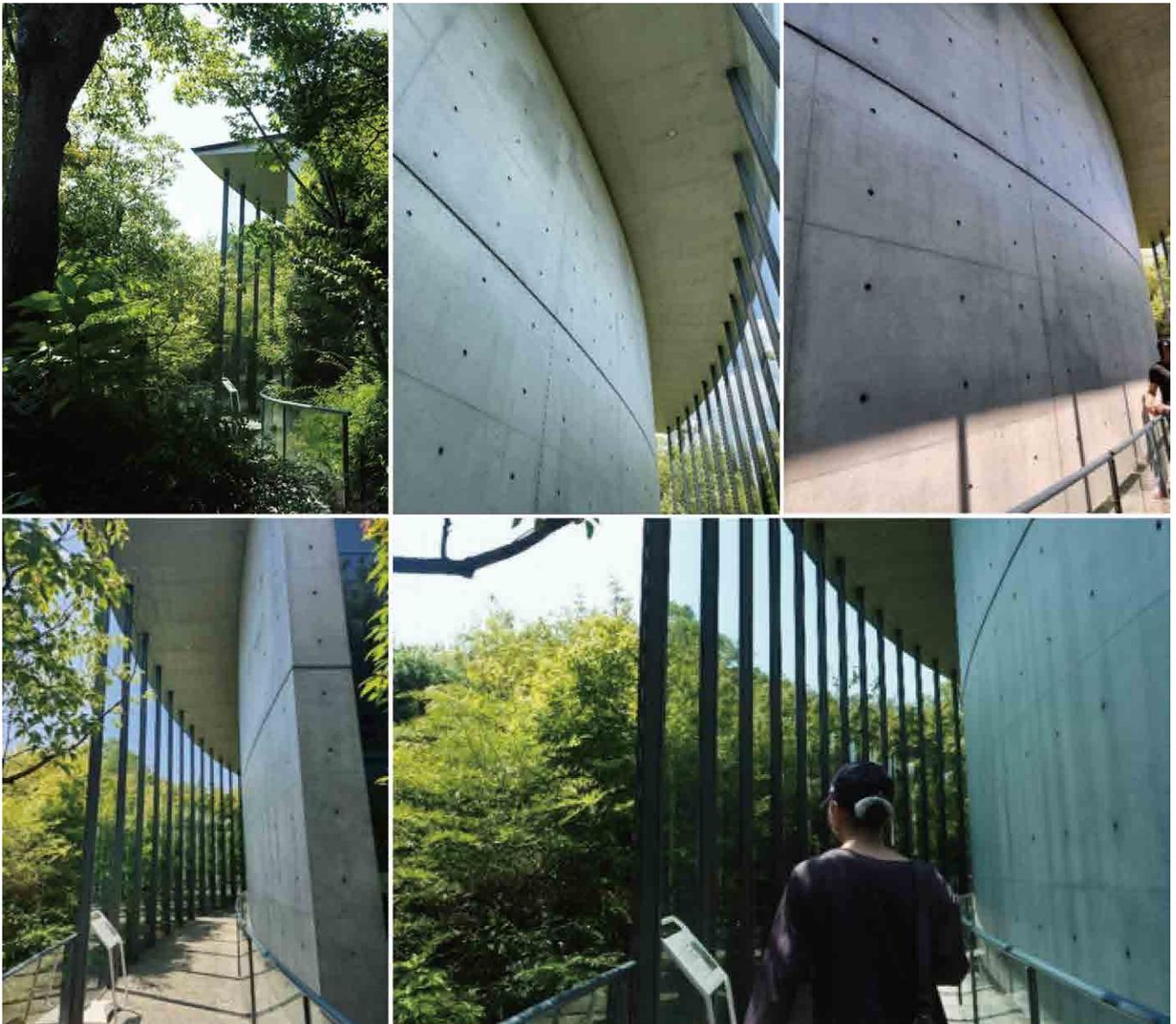
鉄筋コンクリートであるため、内部空間が夏は暑く冬は寒いというデメリットが生まれる。しかし階段に座って会話ができたり、中庭もあることから風や自然光が入ってきたりすることでリフレッシュになる。普通の住宅にはないことがたくさんあり面白さを感じた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

心が動いた瞬間は、中庭の場所である。中庭では屋根を動かすことが可能であり、夏は暑いかもしれないが晴れている日は階段に座り、たそがれながら空を眺められるところがハッと変わった。また雨の日は屋根を動かし、雨の音を聞くことも可能だと感じた。

司馬遼太郎記念館 / 安藤 忠雄

大中 香乃夢



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

司馬遼太郎記念館は、住宅街に囲まれていた。大通りではなく、中に入ったため静かな環境に包まれていた。敷地には庭や緑が設けられていたが、住宅街とは違う別世界の境界線に入るような建築を作り出す関係性を感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから確認すると、緑に覆われていてどんな建物の状態なのかが分からなかった。住宅街の中で本当に司馬遼太郎記念館があるのだろうかと思った。森を感じる自然さが一番確認できる。自然を感じながら内部へ入っていく。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づくのと、回転して動かしているため見えているものが限られていた。コンクリートとガラスの狭間にいて、見えるものは遮られてしまうがガラス側には自然で溢れ、光も入りやすく、とても美しいものだった。また、屋根も高く開放感を感じられた。

F4. 至近距離で何を感じるか

内部空間に入る際にコンクリートである曲線となった道を通っていく必要がある。先が見えない状態で、内部空間へ入った瞬間の展開が楽しみで仕方がないと思った。コンクリートの壁も高く、反対側にはガラス張り、自然環境で落ち着いた空間だった。

F5. 内部と外部の関係性

外部ではコンクリートの壁と木々によって、周囲の住宅街とは別の世界の境界線に立っていると感じ、独立した存在として建っていると思う。それから内部にはステンドグラスがあり、外部から自然光が入り、より一層綺麗だった。

F6. シークエンスの展開

コンクリートである曲線を進んでみると、入口に着く。入口から内部空間へ入っていくと、右側に地下へ降りていく階段がある。階段を降りる際は他何も見えないが、先に進んでいくと一気に広がって沢山の木が全体的に見える。

F7. デティールが心に与える印象

記念館の使われているガラスは普通のものではなかった。デザインも異なっており、単に外部を見せるだけではないと思った。外部からの光を柔らかく取り入れていると感じられる。眺めていると、ふっと力が抜けていくものだった。

F8. 建築に使っている素材について

鉄筋コンクリートや木などを使用しており、シンプルであった。閉ざされた空間を感じるが、木の素材からは温かみやガラスからは光を通すため開かれた空間で柔らかさを体感する。そのため、うまく調和されていると考える。

F9. 建築見学をしての感想

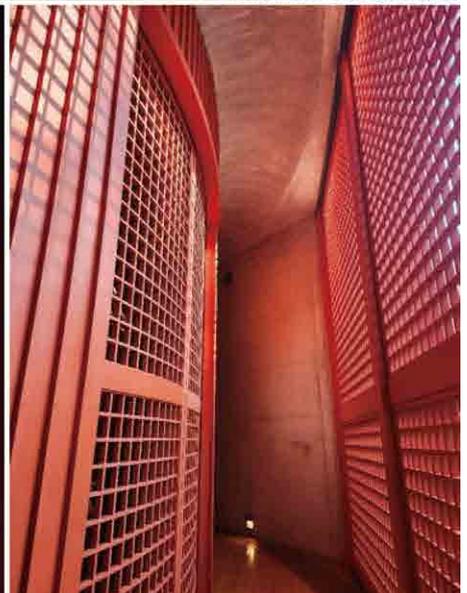
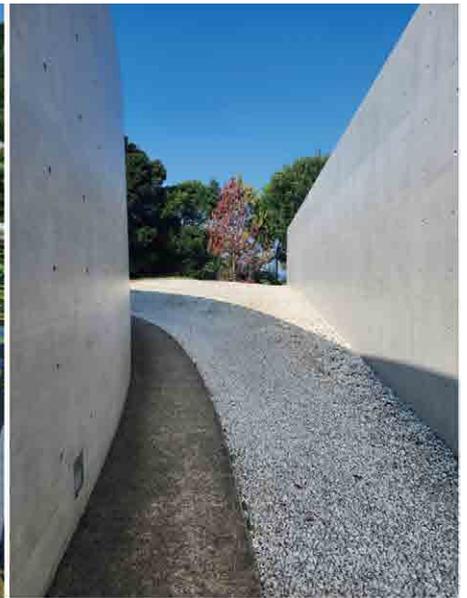
地下に繋がる階段を降りてみると、本の空間が全体的に見える展開がとても面白く感動的だった。階段の横にあるコンクリートは本来なくても良いものであるが、あえてつけることで展開が生まれるということが非常に勉強になった。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

心が動いた瞬間は、内部空間の折り返し階段を降りた際に一気に全体が見えることである。まだ階段にいる際は光だけが入ってくるだけであって、他何も見えない。そのため、一気に全体が見渡せる瞬間がとても面白く感じた。

本福寺水御堂 / 安藤 忠雄

前畑 七海



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

建物は高台に位置しており、高台にあり、境内からは東浦方面から大阪湾まで一望できる。周囲にはお墓や家が点在し、田舎ののどかな風景が広がっていた。建物は豊かな植栽や木々に囲まれており、自然環境に包まれた落ち着いた場所だと感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

巨大な一枚のコンクリート壁がそびえ立ち、建物の全体像は壁の向こうに隠されて見えない。その壁は先まで途切れずに続いているように感じられ、先の景色が想像できないことで、不思議さとわくわく感が同時に生まれた。壁の圧倒的な存在感が、空間の神秘性を際立たせていた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

壁の開口部をくぐり抜けると、再び目の前にコンクリートの壁が現れる。壁に沿って進むと、両サイドの巨大なコンクリート壁は狭い空間から徐々に広がり、圧迫感が和らぐと同時に、もうすぐ建物の全体像が見えてくるのではという期待感が自然に高まった。

F4. 至近距離で何を感じるか

曲面の壁を抜けた先には、一面に広がる大きな蓮池が現れた。水面には周囲の自然豊かな景色が映り込み、神秘的な雰囲気を作り出している。蓮池の中央には池に続く階段があり、その階段を降りると、水面の中を歩いているような感覚になり、自然と空間が一体となった体験ができた。

F5. 内部と外部の関係性

周囲の木々によって住宅が視界から隠され、非現実的で幻想的な風景が生まれていた。また、本堂は西方向から差し込む日差しを取り入れるよう設計されており、柔らかな光が内部を優しく照らしていた。光と影のコントラストが空間の静けさを際立たせ、訪れる人に落ち着きと神聖さを感じさせる工夫が施されていた。

F6. シークエンスの展開

参道を進むとまず静かな蓮池が現れ、建築自体は見えない構成になっている。池の中央から地下へ降りるにつれて光が徐々に減り、階段を下り切った先に、ようやく本堂が現れ、柔らかな光が内部に届き、暗さと明るさ、外界と内界が対比的に体験できる。

F7. ティティールが心に与える印象

午後の西日が御本尊の背後から本堂内に差し込み、空間全体が柔らかな朱色に染まっていた。内陣の壁や柱も一面朱色で統一されており、光と色の反射によって幻想的な雰囲気が生まれていた。本堂を出て回廊を進むと、御本尊の背後に回ることができ、格子のすき間から差し込む西日の光が美しく本堂内を照らしていた。

F8. 建築に使っている素材について

打ちっばなしの大きなコンクリートの壁が印象的だった。無機質な素材でありながら、周囲の水や光、緑とよくなじみ、美しく調和していた。また、このコンクリートの壁が訪れる人の視線や動線を自然に誘導しており、設計の工夫を強く感じた。

F9. 建築見学をしての感想

地上には蓮池のみが見え、建物は地下に埋め込まれている。コンクリートの壁という人工的な素材と蓮池が自然の風景に調和していると感じた。外からは見えない空間構成により、参道を進むにつれて静けさと緊張感が高まり、内部に入った瞬間に心が落ち着くような体験ができた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

開口部を抜けると、両側を大きなコンクリートの壁に挟まれた感覚になり、視界が制限される。目の前には木々と空だけが見え、外の世界から切り離されたように感じた。その壁を抜けた先に突然広がる蓮池の景色に感動した。視界が一気に開け、日の光の反射でキラキラとしている水面が美しかった。

イサム・ノグチ庭園美術館

前畑 七海



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周囲の山に囲まれており、その自然環境や地域の石材文化と深く結びついている。その山々や石切り場に囲まれた立地を生かし、建築や庭園が周辺の環境と結びついていた。外部の自然光や風、地形が内部空間に取り込まれ、展示される石の彫刻や庭園の景観と重なり合うことで、地域の風土とノグチさんの作品が一体となっていた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

最初の印象は、美術館というよりも土地の一部や周囲を囲んでいる石垣によって昔からそこにあった集落のように感じた。建物は山並みや石切り場に寄り添うように低く構えていて、強く主張することはなく静かに存在していた。また、白壁や石垣が景色に溶け込み、地域の風景とつながって見えた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

美術館に近づくと、遠くから見えていた建物や石垣がだんだんはっきりしてきて、最初はただの土地の一部に見えた印象が、建築として意識されるようになる。歩いていくと、白壁や石垣の質感や周りの山や石切り場との距離感が体で感じられて、中に何かあるんだろうというワクワク感が増していった。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離で立つと、建物や庭園の素材感がより鮮明に伝わり、石の質感や冷たさ、そしてスケールを肌で感じることができる。庭園に配置された石の彫刻を間近で見ると、その造形の緻密さや存在感に圧倒され、まるで作品に包み込まれるような没入感を覚えた。

F5. 内部と外部の関係性

建物や庭園は、周囲の山並みやかつての石切り場の地形に寄り添うように低く構えられており、外部の自然環境が建築内部にも取り込まれるような構成になっている。内部に入ると、庭園や彫刻、光や風を通して外の自然を常に感じることができ、建築と環境が一体となった空間体験が生まれている。

F6. シークエンスの展開

山の頂上にはイサム・ノグチの彫刻作品が展示されているが、頂上までのアプローチはあえて遠回りに設計され、先の景色が見えないようになっている。そのため、頂上にたどり着いた瞬間に目に入る彫刻作品とその先に広がる町並みが一体となり、まるでひとつの大きな芸術作品を体験しているかのように感じられた。

F7. ディテールが心に与える印象

それぞれの彫刻作品には作家の強い思いや信念が込められており、抽象的でありながらも観る人の感性に訴えかける魅力があった。ひとつひとつの作品が置かれることで空間に独特の緊張感と存在感が生まれ、空間と彫刻が一体となって調和していた。

F8. 建築に使っている素材について

石の色や質感を巧みに活かしており、石から作られたとは思えないほどなめらかで細やかな彫刻に驚かされた。一の石から生まれた作品もあれば、複数の石を組み合わせた作品もあり、バリエーションが豊富だ。作品には制作背景や込められた思いが感じられ、見る者に強く伝わってくる。

F9. 建築見学をしての感想

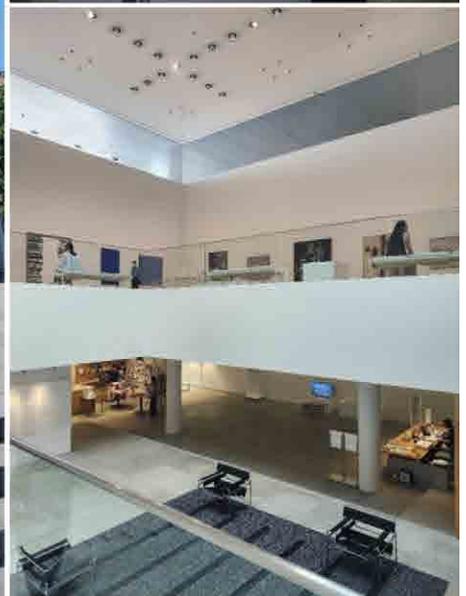
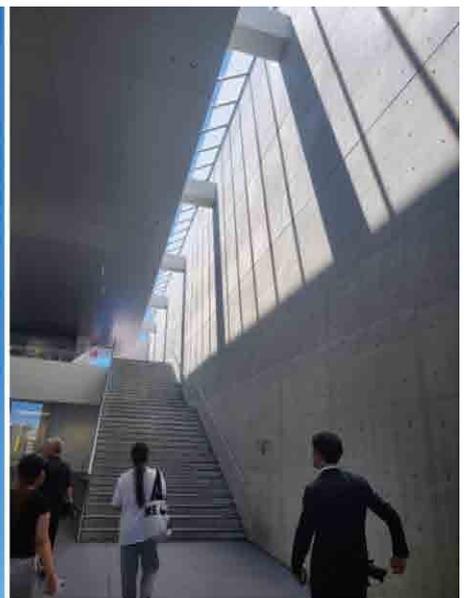
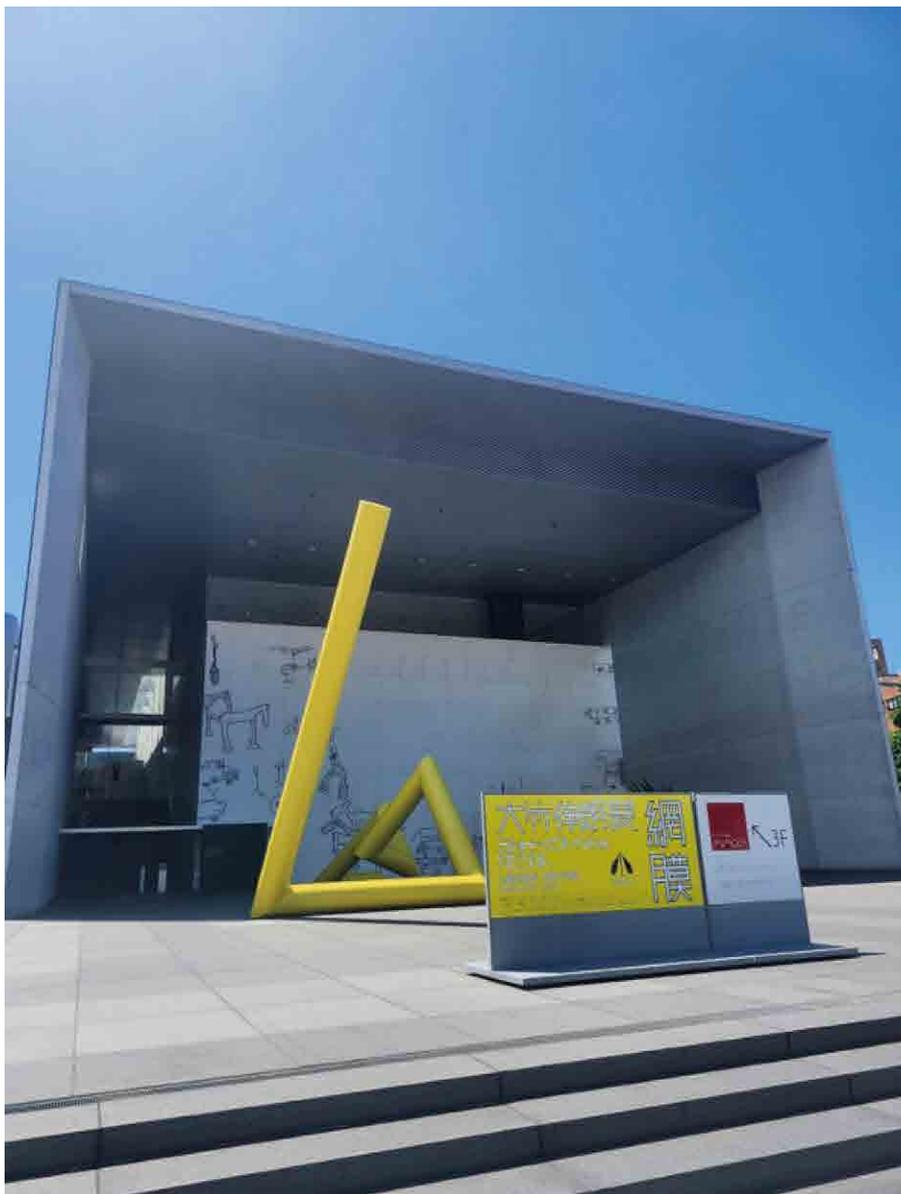
自然豊かな場所に作品が展示されており、周辺環境と作品が互いに影響し合うことで、一体感のある大きな芸術空間が生まれていることに感動した。美術には多様で難しい印象もあるが、実際に足を運んで作品を目の当たりにすることで、その魅力や空間の力を肌で感じることができ、来てよかったと強く思った。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

エナジー・ヴォイドの作品を目にした瞬間、その大きさと独特の形に圧倒され、心を奪われた。漆黒の石で作られた表面はなめらかで滑らかで、思わず触れてみたくなるような質感をしている。展示されている中でも、圧倒的な存在感を放ち、強く印象に残る作品だった。

MIMOCA 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 / 谷口 吉生

前畑 七海



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

駅に隣接しているため、美術館は街の中で象徴的な存在となっており、自然と人が集まる。駅周辺のラウンドスケープにはオブジェや作品が点在し、建物と周囲の環境が一体となって、一つの芸術空間を形成しているように感じられた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見た第 1 印象では、外観は美術館とは思えなかった。一般的に美術館は特徴的な形や色で周囲の目を引くが、この建物にはそれがなく、色も周囲の建物と馴染んでいた。四角い造形も美術館らしさを感じさせず、一見すると街の一部として溶け込んでいるように見えた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

遠くから見たときよりも、近づくにつれて建物の大きさと迫力を強く感じ、美術館の想像以上の規模と圧倒的なスケール感に思わず圧倒されてしまう。周囲の歩行者が小さく見えるほど、建物の存在感がとてもしばたいていた。

F4. 至近距離で何を感じるか

大きなスケールの建物であるにもかかわらず、壁は薄く、重厚感や圧迫感を感じられなかった。正面の木口も厚ぼったさがなくスリムに見え、フレームの先端を徐々に細くさせることで、建物全体の軽やかさを際立たせていた。

F5. 内部と外部の関係性

内部空間には積極的に開口部が設けられており、照明がなくても十分に明るさを感じられた。また、外部にあるコンクリートの壁を内部にも取り入れることで、内部と外部の一体感が生まれ、空間全体に連続性と開放感を与えていた。

F6. シークエンスの展開

美術館の正面はトンネルのように大きく開かれ、建物全体のスケール感が強調されている。建物は非常に大きいにもかかわらず、エントランスは小さく設計され、そこから中に入ると明るく照らされたホールスペースに自然と視線が向かう。ホールは吹き抜け構造で視界が広がり開放感が生まれ、天井の高さによって内部空間のスケール感が強調され、上方を見上げると圧倒されるほどの迫力を感じた。

F7. デティールが心に与える印象

美術館は図書館やミュージアムホールなど、多数の施設が組み合わさった複合施設になっている。図書館内の一部壁面には美術館正面に設置された壁画があり、各施設が独立して存在するのではなく、互いに繋がりを持ち、建物全体として統一感と連続性を感じられる構成になっていた。

F8. 建築に使っている素材について

外壁にはコンクリートやアルミ、石材などが用いられており、それぞれ全く質感や色合いが異なる素材だが上手く融合している。さまざまな角度から建物を見ることで異なる表情を見せるため、建物の外観を眺めながら歩くのはとても楽しかった。

F9. 建築見学をしての感想

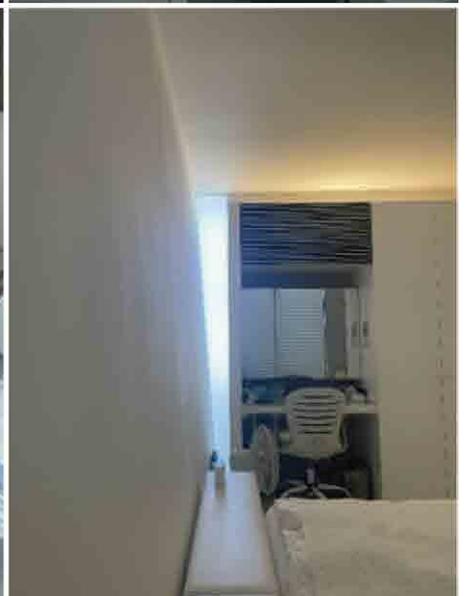
美術館の中に入ると、吹き抜けのホールや天井から差し込む光で、空間全体が明るく開放的に感じられ、心がふわっと軽くなるようだった。大きな建物なのに落ち着いた雰囲気、静かに歩きながら展示を見ていると、自分だけの時間を楽しんでいるような気持ちになった。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

美術館全体を囲むトンネル状のフレームの中に入った瞬間、想像以上の奥行きと圧倒的なスケール感に心が最も大きく動いた。自分がとても小さな存在だと強く実感し、その新鮮な感覚に少し落ち着きを失った瞬間だった。

G-HOUSE / 窪田 勝文

大中 香乃夢



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

G-HOUSE の周辺は、住宅街であった。住宅街ではあったものの人通りの少ないところに建てられていたため、比較的静けさを感じた。周辺に木々はないが光がとても取り入れやすい場所であり、自然の空気感を味わえるものだった。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見ると、白い建物がシンプルであるといい難いが、横に建物が長く、白い外壁が存在感を増していた。光はどこから取り入れるのかという存在も確認できる。また、閉ざされているようで開かれている建築だと思った。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づくと、閉ざされているような外観だと感じるのに、窓などの位置によって光の入り方でワクワク感ともの生まれる。段々外部から内部へと引き寄せられており、内部空間やシークエンスなどがどのようになっているのかが気になった。

F4. 至近距離で何を感じるか

内部空間では、リビングへ行くと開放感が生まれる。光が直接入っているため、とても眩しい環境だった。こんなに明るい住宅は初めてだ。中々ないものであると感じる。水と空が調和していることから、非常に落ち着く空間だった。

F5. 内部と外部の関係性

外部から一部に開口部が見えるが、プライバシーが守られていることから、安心を感じた。内部は、外部の景色が見えたり天井に開口部があることによって空が見えたり、非常に美しかった。穏やかな関係が住宅の良さを生み出している。

F6. シークエンスの展開

二枚の壁があり、振り返ってみると入口が見えた。重圧な入り口が一枚あり、通り抜けるとさらにもう一枚の入口があった。奥には水が張っている状態だった。緊張感だった感情が少し解れた。内部ではリビングで一気に開放感へと変わった。

F7. デティールが心に与える印象

玄関や各個室の部屋など、照明が隠されていた。コンクリートに反射をさせて、部屋を明るくしており、柔らかい光だった。寝室の一部に光を取り入れてあったことから、日々エネルギーを与えられる環境であり、心地が良かった。

F8. 建築に使っている素材について

コンクリートやガラスが使われていた。白いコンクリートの壁で夏の季節でも涼しさを感じられるものだった。白い壁が印象的でとても存在感が強く感じられた。内部はシンプルだが、光や陰によってぬくもりを実感することができる。

F9. 建築見学をしての感想

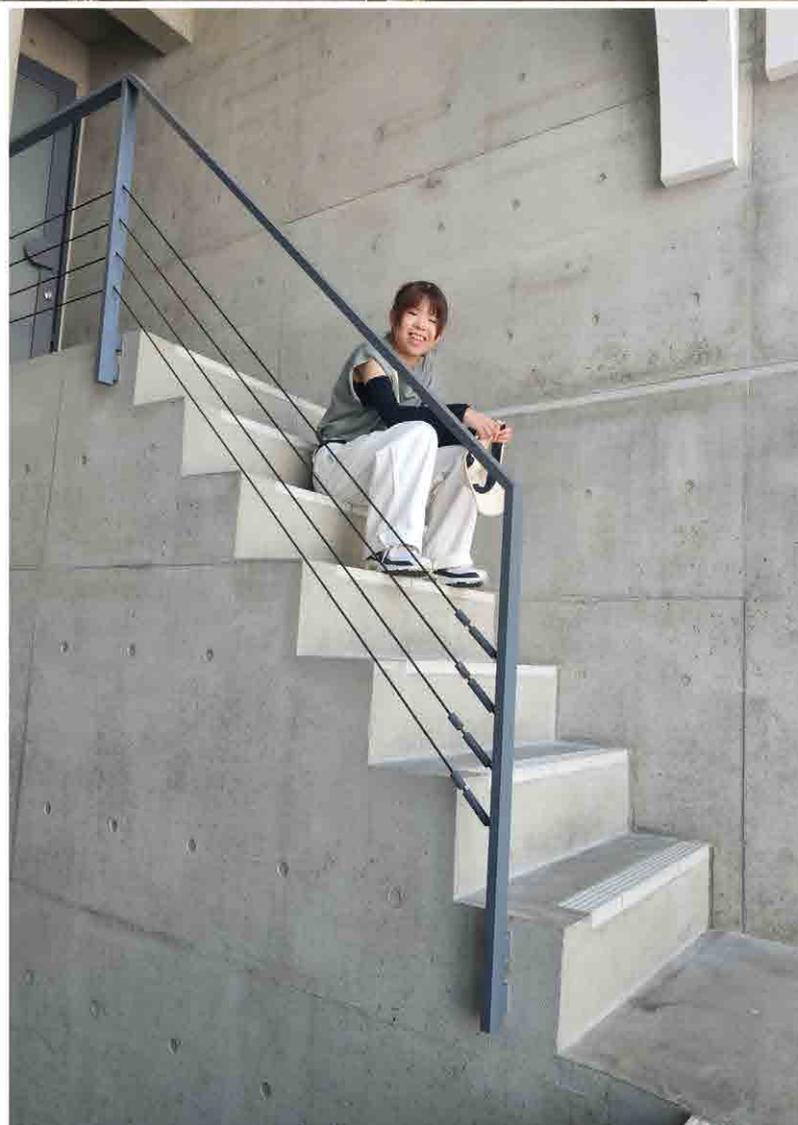
住宅では中々感じられない明るさだった。天井に開口部があり、晴れているとリビングに光が入り、透明感のある空間であり、白く包まれているようだった。日々ワクワク感を感じながら過ごせられる環境で空間を飽きさせない感覚だ。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

心が動いた瞬間は、リビングが見えた時である。ずっと緊張感だったものが、リビングに行ったときに安心感へと変わっていった。それから、住宅に天井の開口部や水を取り入れることによって、人の心を動かしていく瞬間だった。









2025 年 国内建築見学実習

建築国内フィールドワーク

編集：広島女学院大学 人間生活学部 生活デザイン学科 建築士課程

表紙デザイン：Storm Graphics 嵐川 真次

発行：2026 年 1 月

本誌掲載の記事、写真、ロゴ等の無断転載・複製を禁じます。

HIROSHIMA JOGAKUIN
UNIVERSITY

Human Life Studies
Department of Living Design
architect course

Domestic architectural
practice